

売られたお嬢様

2014/2/12

Var. 1. 03

シナリオ…天崎カケル

サークル名…ケチャップ味のマヨネーズ

(家のドアを開ける音)

「ただいま帰りました。と言っても、この時間ではメイドしかいないわよね」

「ふう。今日は確か、お父様もお母様も大使館の方に用があったような……」

「あ、ただいま。ねえ、今日の夜、何か用事はあったかしら？」

(ページをめくる音)

「ああ……。叔父様主催のパーティーね」

「ふう。幼い頃に可愛がってもらったとはいえ、あまりジロジロと見られたくないのだけど」

(二人廊下を歩く音)

(部屋のドア開閉音)

「そんな渋い顔をしないで。あなたが言いたい事は分かってる。それに、嫌だとは言ってないでしょう」

「今日のパーティーの狙いは、倒産しかけた会社へ融資してくれた事への接待」

「男性の目を楽しませる女性が必要なのでしょう」

「そういう扱われ方は好ましくないけど、効果的な事は重々承知しています」

(衣服を脱ぐ音)

「はあ……。やつぱり朝から着ていたものを全部脱ぐと気持ちいいわね」

「ねえ、あなた。この朝から着用していた下着については、いつも通りに捨てておいて」

「もったいないですって？ 八時間も付けていたのだから汚れているでしょ、これ」

「幸運にも、私は生まれたときから裕福です」

「そして、その財力を多少は扱う自由を得ているのですから」

「利用しても問題ないでしょう？」

「それに、衣服よりも直接、私の大切な所や恥部を覆うものどもの」

「ここは、常に清潔でありたいのよ」

「あら？ この袋は……。は？ 叔父様からの指定？ 今日のパーティー用の？」

(がさごそと袋から中身を取り出す音)

「叔父様ったら。本当にスケベね。まあいいわ。指定されているのなら、着用するだけ」

「二つあるけど、どういう意味なの？」

「一つは着用してサイズの確認？ そう……。じゃあ、試着してみましょう」

(服を着替える音)

「うわあ……。これはまた、何というか……。凄い、わね」

「ち、乳首をほとんど隠せてないじゃない。ただバストを支えるだけという感じがしら」

「下は下で、あそこが丸出しになっていて、もはや下着じゃないわね」

「これはちよっと、卑猥すぎるような」

「ふむ。ただいまあ、この私のスタイルであれば、単純にイヤらしい……というわけでもない……かしら」

「美術のヌードと同じよね。美しい者なら、何を着用しても芸術性があるものだし」

「ん。サイズに問題ないわ。それで、もう一つの、これを夜のパーティーに使用すればいいわけね。じゃあ、時間までゆっくりするわ」

「後で、呼びに来てちょうだい」

（部屋のドア開閉音）

「さてと、時間までは読書でもして、知識を得ることにしましょう」

（本のページをめくる音。フェードアウト）

（三秒後）

（車のブレーキ音。フェードイン）

（車のドア開閉音）

「叔父様、こんばんは。あら？ あなた、新しい運転手？ ふん……」

「じろじろと私の胸を見ないでくれます？」

「まあ、そういう意味では、このドレスを選んで正解なのかしら」

「けれど、こんなアルバイト風の汚い男に見られと肌が汚（けが）れるわ」

「あ、はい。叔父様。では、乗車させていただきます……って、やだ、叔父様っ!？」

「このシート、汚れてますわっ」

「わずかに染みがあるじゃないですかっ」

「ちよつと、あなた。このシート。ちゃんと清潔にしておいたのでしょうね？」

「叔父様。教育がなっていないですわよっ」

「まあ、おそらく、臨時に雇っているのでしょうけど」

「この程度の事に気を使えないのでは役立たずも同然です」

「……叔父様。そんなに頭を下げないでください。私も言い過ぎました。申し訳ありません」

「ええ。今回は我慢して、特別につ、このシートでも構いません」

「叔父様。別に私は潔癖症ではありません。綺麗好きだけです」

（車のドア開閉音）

（車のエンジン音。少し長く）

「……あら？ あの、叔父様。いったい、どこへ向かっているのですか？」

「市街地から遠ざかっているような……」

「え？ あの、どうして、このような倉庫ばかりの場所に……。は？ もう到着？」

（車のブレーキ音）

（車のドア開閉音）

「ここで降りるのですね。わ、わかりました」

「えっと、向こうを見るのですか？ 向こうのドアに何か……」

「あら？ あの人は……、鉄鋼業関連大手企業のわがままな馬鹿息子？」

「確か、叔父様の会社に投資した企業の一つだったような……」

「脂ぎった目で見られるのも。けれど、どうしてここで？」

「うっ……。な、何ですか？ちよっと不躰（ぶしつけ）ではありません？ ジロジロと……」

「この、何か言ったらどうなんですか？」

「私に軽々しく近づける権利が、あなたにあると思ってるのっ！？」

「ちよ、やだ。近づかないで。叔父様、これは一体、どういう事ですのっ！？ ひいつ！？」

「て、手をつかまないで。いや、や、いやああっ。舐めないでっ」

「んぐう。ひっ、いやっ」

（ペチャペチャと舐められる音）

「あ、ああ……。うっぷ……。気持ち悪い……」

「気持ち悪いって言ってるでしょっ。あ……」

「んぐっ！？ んんんんっ！？ んちゅ、んむ、ちゅば、んん、んぐ。ぷはっ。この！」

（平手打ち）

「気持ち悪いっ。こ、こ、この私の唇を、よくもっ！！」

（平手打ち）

「きやうっ。う、あ、あ、が……」

「い、痛い……。お、思いつきはたかれた……。この私が……」

「んぐっ！？ んん、ん、んーっ。んう、んう、んは、あふ、んぐ、んん」

（ここから、くちゅくちゅ音）

「んん、ん、んんーっ。ん、んはあっ。あ、はああ、はああ、はああ……」

「よ、よくも……このお……」

「わ、私のファーストキスを、こんな不細工な男に奪われるなんて」

「しかも、暴力まで振るわれて」

「もうやめなさい。こんな事をして、んぐっ！？」

「ん、んちゅ、ちゅく、ちゅ、んんん、ん、んん」

「んんん、んっ、んぐ、ん、ぶあっ。あ、はああ、はああ」

（くちゅくちゅ音停止）

「ひっ！？ な、何を出してるのよっ。気持ち悪いっ。醜いっ。しまいなさいっ」

「お、叔父様っ。叔父様から何か言っつ」

（服を破く音）

「きやああああ。あ、ああ、私のドレスが……」

「ひやあんっ。痛いっ。乱暴にしないで、私のおっぱい、んあああっ。握らないでえ」

「んあああっ！ あっ、んぐっ、あああっ。痛い、痛いのっ、ひいいっ」

「変な物を足にこすりつけない、ぐああっ！！ む、胸を潰さないでっ！ きやあああっ」

「う、うるさいって何よっ」

「こんな乱暴に握られて、痛いに決まって、ふむっ！？ んぐ、んんん」

「んちゅ、んむ、ん、んぐっ、んん、ん、んむう。ふはっ。はあ、はあ……」

「わ、分かったわよ。し、舌を出すからもう、胸を掴まないで」

「はあ、はあ、う、ううう……。叔父様、どうして止めてくれないのよ」

「ひっ！？ わ、分かてるわ。やれば良いのでしよう、やれば……くうっ」

「んむ、う、ううう……。んぐ、んっ、んちゅ、ちゅば、ちゅ、ちゅく、ちゅう」

「んんんっ！？ くっ、んはっ。な、なんでスカートをめくっているのよ……」

「え？ 嘘でしょ？ お、叔父様？」

（衣擦れの音）

「いやああっ。や、やめて、お願いだからやめてくださいっ」

「ひっ！？ か、堅い……熱い……や、やだ、そんなの私の処女が、こんな男に……」

「いや、いやっ、イヤーーーーっ」

（ブチブチと裂けるような挿入音）

「はっ、がっ！？」

「あ、がっ、あ、あ、ぎやあああああああああああああああああああああ」

「お、おお……。お、あ、があ……。は、入ってぎだあ……」

「私の、お、お腹の膣中（おなかのなか）に……い、ぎいいいい……」

「んぐあああっ！ うご、動かないでっ。あぎいっ！」

「ひっ、ぎひいっ。いだ、いだい……。いだいいいっ。ああああっ」

（ぐちゅぐちゅ音）

「はぐっ、んぎっ、きひいっ。ひっ、ひいっ、ひいっ、んあああああああ」

「痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛いっ」

「もう抜いてっ。抜いてくださいっ。本当に、さ、裂けちゃうううううう」

「あっ、あっ、あぐっ。んんっ、んぐうっ、んむっ！？ んんんんっ」

「んちゅ、んむ、じゅる、んぐ、んぐぐぐ、うぐっ、んんっ」

（くちゅくちゅ音）

「んふっ！？ んっ！？ んん、やめ、やめてっ」

「いや、出すって何を出すの？ もうやめてよっ」

「うあああっ！！ あ、あがっ、あひっ！ ひっ、いや、いや、いやああー……っ」

（射精音）

「はうっ！ んっ、んあっ、あっ、あうっ！！ うぐうう」

「び、ビクビク動かないで……気持ち悪い……。はうう。たくさん……出てるう」

「あああ……。お腹にたまっていくう。ああ、何を出したのよお……」

「叔父様あ。変なの、出されてるう」

「え？ せい……えき？ それって、まさか、に、妊娠のための？」

「嘘、ですわよね？　こんな醜い男の……こ、子供……ひ、ひいつ!!」
「いやあああああああああああああああ!!」

「あ、あ、ああああ……いや、イヤよ……こんなの、嘘……」

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

（吐息の音の繰り返し、フェードアウト）

（パン、パンと打ち付ける音。フェードイン）

「ん、んん……。うるさいわね……。ん、はああ」

「パンパン、パンパン、何を叩いている音かしら……」

「はああ、ん、ん、んんんっ、ん、や、やだぁ……。顔を舐めないでよ」

「んもう。犬かしら？ ベロンって舐められちゃったわ」

「あれ？ でも、家ではペットなんて飼っていないはず……。では、今のは？」

「はふ、んっ、んっ、んっ、んぐ、んんん」

「あゝ、もう。もう少し寝ていたいのに。仕方ないわね」

「どこの犬かしら。私の顔を舐めたり、股間で動いたり」

「んもう。誰え？ 笑い声がうるさ……い」

「…………え？ ええっ！？ ちょ、や、いやあああああああああ」

（射精音）

「ひいっ！？ ひっ、あっ、熱っ、んんんっ！ んはっ、あ、や、ひいひいっ」

「お、おしっこ？ おしっこ、あそこの膣中（あそこのなか）に出してるのっ！？」

「くうう、んぐ、んっ、いやああ。驚いたじゃないわよっ。早くどいてっ！！」

「離れて、気持ち悪いのよ、不細工」

（平手うち）

「きやあっ！ あ、う、え？ ひぎい！」

「いや、あ、あぐっ！ げほっ。お、あ、ああああっ」

「っ、強い……。お腹が、壊れ、うげえっ」

「えぐっ、がっ、あ、がっ、あぐう！！ ん、かはあっ。あ、あ、ああ……」

「はあああ、はあああ、はあああ……。抜け、た……。あ、はあ、はあ、はあ、う、うぐう」

「はあ、はあ。そ、そうだ」

「私、叔父様に連れられて変な場所に行って、最低男に無理矢理……」

「ひぐっ！ んああ、お、おしりを触らないで……。はうっ。腰を上げるのも駄目っ。んんっ」

「ん、え？ い、今、お腹……。んあっ、あんっ、動かないでっ。ひいっ！？」

「苦しい。お腹が重たい。液体が、くふう。たぶたぶ、んんっ、揺れて、んはっ、あんっ」

「はあ、はあ。この感じ、お腹の中に水が入ってるみたい……」

「え？ 嘘、でしょ？ たくさん、入ったのが、精液？」

「ま、まさか、ここにいる男達の？」

「いち、に、さん……。ろく……。きゅう、じゅう……。じゅうに……」

「じゅ、十五……人。え？ まさか、全員出したの？ せい、えきを？」

「ひ、い、いやあああ――――――――――」

「いやーっ、いやっ、いやっ、いやあああああ。ああ、聞こえる、聞こえちゃうっ」
「お腹、お腹から聞こえるのっ。たふたふって、精液がたまってるのが分かるのよっ!？」

「いやあああ。出して、出させて、気持ち悪いのを早く出さないと駄目っ」

「ひいっ、ひいっ、ひあああっ!!」

「な、なんで、大きいままなのよ……。もう、終わったんでしょ？」

「んっ。あ、ふぐ、ううううう」

「お腹、やっぱりたふたふしてる。気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い」

「あっ、ああっ。ん、ぐう……」

「ぬるぬるして、いれやすい？ 知らないわよっ。女が意識を失っている間に好き勝手するなんて最低だわ」

「へらへら笑わないでっ。不細工どっ!？ もっ、おとおおとお……」

「おっ、ごっ、おあっ、がっ、ふぐっ!」

「んっ、んぐっ、ぐあっ、あ、あっ、がああっ、乱暴に、ひぐっ。しゅる、な、あああっ」

「あっ、あっ、あぐっ、んんんっ。んっ、んっ、んんんっ。ひっ!？」

「いや、こないで、並ばないでっ」

「きやあああ。あっ! あ、太くなってる」

「やだ、どうして大きくなるのよっ」

「抜いてっ、抜きなさいっ。抜いて……」

(射精音)

「ひっ、きやああああああああああああああああああああああああああああああ」

「あひっ、んっ、んひいっ。ひう、あ、あ、ああ……」

「また、出されたあ……。何で、こんな事するのよ……」

「うぐぐぐぐ……」

(小便音)

「もう、抜きなさいっ! う、ぐっ、うう……。ああ、熱い……。え？ おしっこ……?」

「私の膣中で、本当に？ した……」

「は、はは……。あはは……。こんなの、夢、そうよ、夢よ……」

「きつとすぐに、目が覚めて……私は元の裕福な生活を……」

(小便音)

「ふあ、あっ、ああああ……。はあ、はあ。精液が、全部出てくう」

「はあああ、はあああ……」

「う、ぐすっ。……まだ、何かあるの？ もう許してえ……」

「え？ これから、一ヶ月……?」

「一ヶ月、何をするのよ……。嘘、ここで、ずっと、せ、せ、せ、せ、せ……ずっと?」

「こ、こんな汚い倉庫みたいな場所で、男達に乱暴され続けるの?」

「一ヶ月も？ 叔父様、叔父様はどこ?」

「もう帰った、の？　じゃあ、私は、本当に一人で、一ヶ月……」

「いや、許して、お、お金、お金なら出します。たくさん、渡しますから、もう許して……」

「精液いや、嫌い、精液駄目……」

「ひっ！？　い、いや、やだあ、もう許してください。本当にもう、あ、あ、あ……」

（ぐちゅっという感じの音）

「もう許して――――――――――」

（パンパンと打ち付ける音、フェードアウト）

「一ヶ月。その間、私は陵辱されるという」

「そんな事はない。叔父様が助けに来てくれる。もしくは、お父様かお母様が誘拐事件として、護衛達と救出に来てくれるはず」

「そう信じて、一日、一日、醜い男達の薄汚い欲望に耐えていた」

「毎日、朝から深夜まで犯されているうちに、意識が何度も飛ぶようになっていく」

「今日こそは助けてくれる。明日こそは、明後日こそは……」

「いくら望んでも、希望は叶うことなく。むしろ、そうした淡い期待を抱き、叶わずに崩れ落ちる姿を男達は楽しんでいるようだった……」

「そうして、一週間が経った頃……」

（重たい鉄ドアが開いたような音）

（どこどこか入ってくる足音）

「う……。あ？ 誰？」

「まあ、誰と言ったところで、私を陵辱するクズどもよね……」

「はあ、今日もまた始まる。あら？」

「うっぐうっ。臭い……。な、何なの？ 臭いわ、あなた達……」

「見ないでよ。汚い、気持ち悪い……。来るな」

「な、何よ？ まだ信じているのかですって？」

「ええ、信じているわよ。もうすぐ、叔父様が助けに来るわ」

「何かトラブルがあつて、私は酷い目にあっているけれど」

「そ、それでも……すぐに助けてくれるわよ」

「ニヤニヤと笑つて、悔しい。見ていなさい。私は決して、屈しない」

「ゲスどもに、必ず死にたくなるほど辛い目にあわせてやる」

「うっ、だから、臭いつて言ってる……で、しょ……」

「はああ、はああ。すう、はああ、すうう、はあああ。臭いのよ……」

「ち、近づかないでよ……。はあ、はあ、はあ、はあ」

（鼓動音）

「浮浪者達は……。こ、こんなところでズボンを下ろさず、うぐ……は、働きにいきなさい……」

「はああ、はああ。ぐ、ううう。どうして、こんなに体があ、熱くなつてきて……」

「うう、汚い男達ね」

「このような連中にまで、陵辱されるのかと思うと泣きたくなるし、嘔吐（おうと）したくなる」

「それなのに、私の体もあそこも凄く熱くなって……」

「はあああ、はあああ、うつ!？」

「んんん、鼻に、押しつけないでっ。んあああ、あ、はああ、すううう、はああああ」

「くっ、うう。舐めたくなんかないわ」

「びよ、病気になってしまうものお……。おふう、ん、はああ」

「ほえ?　び、やく……?　びやくってえ、はあ、はあ。なあ……に?」

「ああ……。もう、頭がぼうつとしてきたあ」

「こんなに臭くて鼻が曲がりそうなのに、もう、何も考えられなくなって……」

「きやうんっ!!　ん、あ、あああ、あひいつ。おっぱい、触るなっ。はああ、はああ」

「くう。こんな、手錠でつながれて動けない女にしか、て、手を出せないなんて、男として最低……。んひいつ!!」

「ひっ、ひいつ!　ああ、べたべた触るなっ。んああっ!　あっ、あひいんっ!!」

「くふうううっ。うぐっ、う、くはあっ!　あ、はあ、はあ、はあ……」

「ち、乳首は……。さわりゆなあ……」

「よだれ……。垂れてるとか、言わないでよ……。気持ち悪い。さ、触るな。んはあっ」

「ふあ……。え?　脇毛?　うそっ、そんなの、はえてない……」

「あっ!?!　や、こんなに?」

「うるさいっ。ぼーぼーとか言うなっ」

「こ、こんな場所にずっといれば、むだ毛ぐらいはえるわよっ」

「うううう。恥ずかしい。こんな奴らに、こんな恥辱を味わわれるなんてえ」

「いやあっ。嗅ぐな、嗅がないでっ!!　そんなところに触れるなっ」

「う、ぐすっ。ぐ、ううう。卑猥な言葉……。マン毛とか言わないでよお……」

「ふあああ。男性器……。う、ぐ、ゴクリッ」

「はあ、はあ、また、私、どうして生唾なんか……。ち、違う。興奮してるんじゃないっ」

「これは、そ、そう」

「よだれが垂れないために、んぐっ。ん、ゴクリッ。飲んで、だけなんだからあ」

「はああ、ふうう、はああ。くさい、くさいくさい……」

「ふえ?　ち、ちん……。や、言いたくない、そんな下品な言葉」

「ニヤニヤ笑わないでっ。う、くうう。はああ、ふうう、んはああ、あ、あああんっ」

「はれ?　今、体が勝手に震えて、あそこから、おしっこが出ちゃった……?」

「う、あ、あ……。舐めたく、ない。舐められないわよお、こんなにくっさいの……」

「う、ぐう。ううう、脇にこすりつけないで」

「んああ、肌にもおっぱいにも、あんっ。ち、乳首にも押しつけないでっ」

「ああ、もう、ふう、はああ。言え、ば、良いんでしょう……。言え、ば……」

「ゴクッ。ん、はあ、はあ、ち、ちん……。ち、ぐ、ううううう」

「へ?　い、言ったらお風呂に入れるの?」

「ほ、本当な？　ずっとタオルで乱暴に体を拭かれるだけなもの」

「本当だったら、入りたい。お風呂につ」

「言う……言うから、お風呂に……。はあ、はあ、ふう、はあああ、すうう、はあああ」
「ち、ちん、ちん……ぽっ!!」

「い、言ったわよつ。んあああつ。頬（ほお）に、押しつけないでつ。んぐぐぐ」

「ええ？　連呼しろ？　そんな恥ずかしいこと、くうつ、ぐぐぐぐ」

「はあああ、はあああ、ああもう、涎が止まらないし臭いし、お風呂入りたいつ。くつ」

「ち、ちんぽっ!!　おちんちんつ。おちんちに囲まれてますつ」

「おちんちんの臭いで興奮しているのっ!!　言ったわよ、これ……でこっ!？」
（ぐじゅぐじゅと大きめにかきまぜるような音）

「んぽっ!？　おつ、ごふっ!？」

「ふぐぐつ、んぶつ、げほつ。がはつ。あ、はあ、はぶっ!？　んごおおおつ」

「んぶつ、じゅぶつ、じゅぶつ、ぶふつ。んぐつ、げふつ、げほつ、ごぼつ」

「あ、頭を、押さえ、つけら、れて、息が、く、るしつ」

「んぐううううううううううううううう」

「げほつ、ごえっ!」

「がはつ、げほげほつ、げほつ、はあつ、はあつ、はあつ、んぽっ!？　おごこっ!？」

「ぐえっ、げ、が、ご、ぐぶぶぶぶぶ……」

「だ、しゅ、げで、ひ、ひぬ……う、ぐげええええ」

「がふつ。ふ、ぐ、ぐひつ」

「ひぐつ、う、ぶふつ、んん、ぐ、ふー、ふー、ふー、ふぐ……、うぽっ!？」

「ごえっ、げほつ、おごこっ、ごえっ、ぐげつ、げぶふつ」

「んごこっ、お、ごこっ、おごおおお……つ」

「ぐええっ。えおつ。おげ、げ、ぐぶつ、ふつ、ふつ、ぐ……」

「ぐぐ、うぶつ。んごお……お、お、お、おごえっ!!」

「んぐおおお……」

（射精音）

「おぼっ!？　ごほつ、ご、お、ぶぶ、ぶぐ、ぶ、ん、ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ」

「うぶぶぶぶ、んぐ、ゴクツ。ん、ぐええ」

（ずるりと抜け出る感じの音）

「ぜー、ぜー、ぜー、ぜー、げほつ、かはつ」

「はあ、ふう、ふえ？　ごえっ!？　おごこっ!？」

「はぶつ、んぽつ、んぐ、ん、んん、ぐふつ、ぶじゅるるる、ふぐぐぐ、んぶうっ!？」

（射精音）

「ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ、ぶふっ!　んぶぶぶ、ゴクツ」

「……がはっ、あ、はああ、はああ、はああ、はああ、ま、まだ……するの？」

「げほげほ。はあ、はごつ！？ おごごつ、おつ、おぶつ！？」

「んぐつ、んぐつ、んんつ、んつ、んづつ。ふぐつ。んんん、ぶふつ!？」

(射精音。繰り返し)

「……ふっ。ん、ぐ、お、お、お……」

「おぶつ、う、うぶ……。お、終わった……。の？　もう飲まなくても、良（い）いの……。かな？」

「う……うふっ！？　　う、ぐぐぐぐぐぐぐ、ふぐっ！？」

「ええええええええええつ。おえええええつ、ゲロロロロロツ」

「おええええええつ。おえつ、げほつ、おげえええつ」

「げほげほ、がはつ、はあああ、はあああ、はあああ……」

「うあ？ あ、な、なんでしゅか……？」

「か、かみ、髪のへえ、ひっぱりやれるとお、いた……いれす……。んあつ」

（小便音）

「うああ、あ、やめれ……いや、やだ、きもち……悪い……」

「あ、でも、わたしも、吐いて、ばかり……。うふつ。うええええええつ」

(小便音×2)

「んぐう。は、ははは、きたないけど、あつたかい……。ふ、ふふ、あははは……」

「おしっこ、気持ちいいかもお……」

(小便音)

「はああ。はああ……。ああ、みんな、帰ってくんだあ……。そっか、終わったんだあ……」

「ふ、ふひひ……。やっと終わったあ。苦しかったあ。でも……。死ぬほどじゃ、なかったかなあ……」

「ふふ、ふふふふ……」

(フェードアウト)

（小さいなローター音）

「セックスをするだけだったのに、いつの間にか、私の体がいじられる事が多くなってきました」

「泣いたところで、終わるわけがない」

「叫んだところで、終わるはずもない」

「無理矢理感じるようになった体は、男達の猥欲を満たすだけ」

「もう、おしっこを浴びるどころか、飲む事も多くなってきました」

「そうして体の内側から腐っていくような感覚の中、私の性感帯を破壊する日が来てしまいました」

（鉄ドア開閉音）

（激しく怒ってる）

「ん……。はあ、また……。始まるのね……。ん？ あ、あなたはっ！！」

「ぺっ。こつちを見ないで。気持ち悪い」

「早く出て行け」

「あなたに何かをされるなら、何十人もの男に陵辱されたほうがましよっ」

「私の処女を奪った事、絶対に許さないっ」

「な、何よ？ ニヤニヤして気持ち悪いって言ってるでしょっ」

「はあ、はあ。そのピンク色のリモコンみたいなので、また変なことをするつもり？」

「さっさと出て行って他の人にやらせてよ」

「本当に気持ち悪いわ、あなた。それに、あの黒いのは何よ」

「まるで、おちんち、じゃない。男性器みたいだわ」

「う、うう……。だから、近づかないでっ。私は本当にもう、はうんっ！！」

「んく、ひゃあんっ」

「ち、違っ。エッチになったんじゃないわっ」

「これまでさんざん陵辱されて、体が勝手に敏感に……」

「んんんんっ。んっ、は、あうっ。んはあ。はあ、はあ、はあ、はうんっ」

「右の乳首、左。じゃうっ。わ、腋にまでつけるの？」

「臭いって言うなっ。毛深いって言うなっ」

「言葉遣い？ 悪くもなるわよ、こんなところにいれば」

「え？ そ、そこはダメっ。そ、そこは凄く敏感、んああああああっ」

「あっ、ぐううっ、んっ、んあっ、あっ、あああっ！！ あ、はあ、はあ、はあ、はあ」

「な、何なのよ、この変なおもちや……。私の体につけて、何をするつもり？」

（スイッチを入れる音）

（ローターの音）

「きやうつ。んっ、あつ、あつ、やつ、んんんっ。ブルブル震えて、んああつ。あ、あんっ」

「や、やめ、はうんっ、んはっ、あつ、あつ、あふう、んくう、んん」

「やめ、スイッチ、切ってえ」

「んんん。な、何か言いなさいっ。あんっ。や、あああ、あ、あふう、んんん」

「んふう、んはあ、はあ、はうっ、んんっ」

（スイッチをあげる。ローターの音を大きくする）

「んああああつ。や、やだ、あああつ、あんっ！」

「んくっ、んん、んふう、んはあ、はあんっ」

「あああ、このお……」

「変態、はやく止め、へひっ！？ ひいつ、い、ああああ、あん、んあつ、あつ、ああああああ」

「くふう。ふぐっ、んっ、んくう、うんん」

「くう、にやにや、はあんっ、笑って……んあああつ」

「んんっ、んっ、んっ、んんんんっ、んはあああ、はっ！？」

「や、くうう。き、気持ちよくないわよっ。あなたの顔を見たおかげでねっ」

「はあつ、はあつ、はあつ。か、必ず、復讐してあげる」

「か、かく、覚悟をしてえええ……。ふああ、あ、あはあああ」

「ふう、ふう、んんっ。んっ、んふう、んはあ、はあ、あつ、あんっ、んあつ！？」

（スイッチを切る）

「あつ……。はあああああ、んんっ」

「やだっ。今の感覚って、もしかしてお漏らし？ お、おしっこが出ちゃったの？」

「み、見ないでよっ。うぐ、うう、見ないで……」

「愛液？ ち、違うわ。これは、その、お、おしっこ。おしっこが出ちゃったのよっ」

「こんな物で、ふう、はあ。感じたわけじゃないんだからあ……」

（弱々しく言ってる）

「ん、おっぱいやあそこが、まだ震えてるみたい。弱くしびれて、くう。体が、疼いちやう」

「はああ、はああ、違う。感じまくってるわけじゃ、ないのよお……。はああ、はああ」

「ふえ？ そ、それ、それは何なの？ 男性器みたいな形をしてるの」

「な！？ 男性器を模したもの？ そ、そんな変な物まで……何に使うのよ？」

「ひうつ！？ んあ、あ、それ、まさかあそこにいれるの？ 嘘でしょ……」

（ぐちよぐちよとした感じの音）

「ふああああああつ！ あつ、はああ、はああ、んふうううううう」

「き、気持ちよくなってないっ！！」

「くあっ！ あ、奥に入れすぎ、んんっ。んっ、んあっ、あんっ」

「あっ……。はああ、ふう、はあ、ふう、はああ」

「くう。好き勝手にもてあそんで……。よくも……」

「ふあ？ あっ！？ だ、だめ、その小さいおもちゃのスイッチは入れないで」

「ま、まだ、しびれていて……」

（バイブのスイッチを入れて、グイングイン動く感じの音）

「ひいいいっ！！ い、いやああっ！！」

「これ、だめ、あっ、や、ふあああっ、あっ、ああんっ」

「あっ、や、あああっ、あっ、あああああっ、がっ、はひいっ！」

「ひっ、ふああっ、ああああああっ」

「あぐっ、んっ、んんんっ。んはっ、あっ、あひいっ！！」

（スイッチを入れる。ローターの音を一番大きくする）

「っ、っよ、っよいつ、っよしゅぎいいいっ！！ お腹の中が、あああっ」

「えぐ、えぐられてるうううっ！！ んぐううっ、うああっ、あひっ！ ひいいいっ」

「はあっ、はあっ、はぐっ、んあああっ」

「あひっ、ひっ、ふぐっ、んあああああっ、あっ、ああーっ」

「あっ、がっ、あっ、ああああっ！ はあっ、はあっ、はぐうううっ」

「よく、ないっ。気持ちよいわっ」

（スイッチを入れて、レベルを変えた音〓スイッチ音）

「あひいいいいいっ！！」

「ひっ、ひいっ、ひいっ、お腹があああっ。あっ、ああっ、あそこが壊れるううう」

「んんんんっ、んんっ、んぐっ、ふあああっ、あっ、ああーっ。あひいっ」

「いや、やだ、やああっ。グネグネ動きすぎるううっ」

「動いちやダメっ。や、やだ、ああああっ」

「ふぎいいいっ、抜いて、抜きなさいよっ。外しなさいよーっ」

「あがあっ、がっ、あっ、あああああっ。あひいっ、ひっ、ひぐううううううううう」

「んぐっ、かはっ。あ、あが、あ、ふう、ふう、ふはあああ、あひっ」

（スイッチを切る）

「……………んはあああああ。あ、あ……。あ、ああ……。あ……」

「ぬ……抜いて……。これ……。おもちゃ、抜いて……」

（スイッチを入れる）

「ふひっ！？ ひっ、いっ、ぐああっ、あっ、あああああああああああ」

「あーっ、あーっ、あああああーっ」

「やら、らめえっ。あしよがほんろに、こ、こ、ごわれりゅううううううう」

「うぐうううっ、ああーっ、あーっ、あーっ」

(スイッチを切る)

「あっ……………おふう……………」

「はあああ、はあああ、はあああ、こ、こと……………ば？　ことばづか……………い？」

「あ、う、う、うう……………う、あ……………」

「わ、私にもっと、卑屈になれって言ってるの？　服従させたいって事……………」

(スイッチを入れる)

「ひああああああつ。やめ、やめて……………あひいいいいい」

「いつ、がつ、ああああつ、くる、きちやうつ！！　あの真っ白いのが、く、ぐ、ぐ、ぐるううううう」

(潮吹き音)

「あひんっ！！　ひっ、ひ……………んぐあつ！　あつ、あひんっ」

「ひっ、ひぐっ、ひっ、ひあ、あ、あ……………」

(スイッチを切る)

「はあああ、はあああ……………。い、いき……………イキまひた……………」

「イキまひたから、抜いて……………くだしやい……………」

「潮……………ふき、まひらから……………も、もう、やら、あそこ、ぐちよぐちよ」

「こわれ……………りゅ……………」

(おしっこ音)

「う……………はああああああ……………。おひっこお……………でひやったああ……………」

(おしっこ音大きく)

「んふううう……………。はああああ。あは、はああああああ」

「ああ、おしっこ、きもち……………いいよお……………」

(鉄ドアを開ける音) (足音) (服を脱ぐ音)

「……………な、なんれしゆか？　あ……………ひっ！？　お、おちんちん……………いっぱい……………」

「も、もうやらあ……………。あそこが、ほ、ほんろに……………」

「んあつ、や、顔に、んんん」

「こすりつけないで、んあつ、あぶつ、んんんつ、やめ、んあつ」

「ふああ。みせないでください。ごしごし、こすって、えつちな液体、顔に、んんん」

「塗らないでえ。はあああ」

「すうううう、はああああ、すううう。んはあああ。おとこの……………においが、つよすぎるう」

「ふはああ、あふう、んはああ。ふえ？　よだれ……………？　はれ？」

「あ、ほんろだ……………よだれ、出てるう……………なんれ？」

「好きに、なったから？　おちんちんが？　そう……………なのかなあ？」

(スイッチを入れる。ローター音。小さく)

「ふああああああ……………。これ、このぐらい震えるのお……………しゆき……………」

(鼻に男性器をおしつけられる)

「はああ、はああ、んふう、んはああ、あ、え？ ふがつ！？ ふが、んががが」
「は、はなが、んがが。だんしえいきで、ふぐ、ふさがってる。んぐう」

「んはああああ。くしい、くしいいいい」

「くしいのにい、んはあああ、ぞくぞくしゅるうう」

「んひう、ひつ、ひふつ、んぐ、んはあああ。も、もうおかしくなっちゃうよお」

「いやらあ、みないれえ、み、みないれくらはい……」

「んぐぐぐ、んがつ、あがつ、はあ、はあ、はあ」

（徐々に興奮してくる）

「あああ、でるんら。だしやれるう。んはああ、あ、はあ、はあつ、はあつ、はあつ」

「はあああ、どろどろのしえいえきが、あ、ああああああ♪」

「あつ！？ や、やら、おもちやのスイッチ、入れちゃやだあ。ふがつ」

「はあ、はあ、す、吸い込む……。鼻から精液吸い込むから、スイッチ入れないでっ」

「ほんと、ほんとに、鼻から精液飲みますっ」

「だから、スイッチ。んがつ！？ んぐつ、んごつ、おつ」

（射精音）

「ふぐつ！？ んぐつ、げほつ！ おつ、ごつ！？」

「ごふつ！ ふごつ、ふごごごつ、んぐつ、ごほつ」

「ずずずずつ！ んぎつ！ げほつ。鼻がいた、ひつ！？ スイッチやらっ」

「ずずずずつ、ふごつ、ふごごつ、んぐつ、んんんつ、ずずずずつ、げふつ！」

「げほげほつ、ふぐぐ、ふご、ずずずずつ」

（射精音）

「ぶはっ。えほえほつ。ふあああ、真っ白……。まっしろにそまってくう」

（射精音）

「んはあああ、顔も体も口の中も、鼻の中もぜくんぶ、せいえきい……」

「は、ははは、くつきい……。えへ……」

「げほげほつ。んはああ、鼻から精液でてきちゃったあ……。は、はは、ははは……」

（おしっこ音）

「はあああ。おしっこしやわー、気持ち良い……。はあああ、はあああ」

「あああ、精液が流れちゃう。ふえ？ 精液嫌い？」

「あ、う、そ、そうよ……。嫌い……。きら……。い？」

「あれ？ 嫌い……。なのかな？ ああでも、もういいや。考えるの疲れちゃったあ」

「今は、このあったかくいシャワーを浴びていたあい。はあ……」

「あは♪ きんもちいいい♪」

（おしっこ音フェードアウト）

「何度も何度もイカされ、体中から水分が出たような感覚すらありました」

「だからでしょうか。臭くて醜い男達からの温かくて心地よい刺激のあるおしっこをかけられて気持ちいいと思ってしまいました」

「その次の日から、私は一日の最後におしっこシャワーをしてもらうようになったんです。ふ、ふふふ……」

「はああ、あの温かいおしっこ。とっても気持ちいいんですよ」

「一日の疲れを癒してくれる感覚が、たまらない。もっと浴びたい。もっと、もっと……。私の処女を奪った、あの男のでも……」

(水をかけられる音)

「う……。うん、あ？ はああ……。臭い……。精液、の臭い……」

「口から？ はは、私臭い……」

「んあつ。髪を掴まないで……。疲れてるの。顔をあげるのもつかれっ!？」

「ひっ!？ い、え？ えっ!？ な、何、コレ……」

「ず、ズボンの上からなのに、すぐもっこりしてる」

「こんな大きい、今日まで無かったわよ？」

「はああ、はああ、はああ、すうう、はああ。で、でか……い……」

(ズボンを脱ぐ音)

「え？ や、うそ、脱ぐの？ そんな、はあ、はあ、はあ、ゴクッ」

(パチンと軽く叩くような音)

「んあつ。ひうっ!？ お、お、おおおお、大きすぎる……。気持ち悪い、化け物……」

「あ、あなたは!！ え？ こ、こんなのとセックス？」

「嘘、嘘でしょ？ 本当に壊れるわよっ」

「わ、わ、私のあそこを壊しちゃうの？ や、やだ、こんなものなんて絶対にイヤよっ」

「きやああつ。お、押しつけないでっ。んあつ!」

「あつ、んぐぐつ、んんんつ。すう、はあ、すう、はあ」

「臭い……。これ、今まで一番臭い。鼻が曲がるう。んあああつ。袋まで、ひいっ」

「いやあつ。本当に、こいつとだけはっ。んぐ、きやあつ」

「あ、あ、いやあああつ。おしりを持ち上げないで、ひっ、ひいっ」

「怖い、怖い怖いっ。怖いのっ。こんなのダメっ。本当にダメっ」

「許して、許してくださいっ!! お願いですっ」

「い、い、iiiiiiii……」

「いやあああああああああああああああああああああ」

(挿入音)

「ぎやあああああつ!! あああーっ、あがつ、あーっ、がああああああああつ」

「がはっ。はっ、はがつ、あ、ああああ……。う、ぐえっ」

「げえええ。はーっ、はーっ、はーっ、はーっ」

「さ、さけ、裂ける、裂けちゃうっ。ひぎいっ」

「いやっ、あがああつ。もう、いれないでーっ」

「おごっ、おえええっ。ふぐっ、んぐっ、んんんっ。がはっ」

「はああ、はああ、はああ、はひいっ、ひっ、ひぎっ」

「い、がつ、がが、が……。ぐひいっ。ん、おとおお……。おあ、あ、あ……」

「はー、はー、はー、はー、はー、はー」

「う、うご……。か、ないで……。と、止まって……」

「はひっ、ひっ、ひっ、ひぐ、う、あ、あ……。止まった……。の?」

「あ、あは、はは、やっど、ひ、ひひひ……」

「はれ? な、なんれ、あなた、わ、わりやってりゆの……?」

「ねえ、もう、おわ、終わるよね?」

「だって、わたしのあしよこ、こ、こわれちゃった……。から……」

(激しくかきまぜる音)

「んんんんっ!! んぐっ、あつ、あああああああああつ」

「はひっ、ひぎいっ、いぎっ!」

「あああつ、内蔵ダメ、おごっ、ごえええっ。破裂するうううっ」

「ぎやあああつ!! あつ、あつ、あひっ、ひぐっ、んあつ、あつ、あああああつ」

「ふーっ、ふーっ、ふぐうっ、んっ、んがっ、あつ、あひいんっ!」

「ひっ、ひああつ、あつ、あつ、ああんっ」

「あ、ありえ? 今、わたし、あえぎ声……。んんんっ、んぐっ、んひいんっ」

「どうしてえ、苦しいだけなのにいいいんっ」

「んんんっ、んぐっ、んはあつ、はあんっ」

「あんっ、あぐっ、んんっ、んはあ、はあ、ああんっ、あんっ、あつ、あんっ」

「やだ、くううう、こんな、あああんっ。はああ、あふっ、んぐっ、んっ、はあんっ」

「はああ、あつ、あつ、んんんん」

「はああ、はああ、やだ、何か変っ。変よっ」

「こんな、また変な薬でも使ったんでしょっ。んああつ、あつ、ひうんっ」

「くああ、あつ、あぐっ」

「んふう、ふぐっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んんんっ、きやあああんっ。……。っ!」

「ふえ? い、今の声って!」

「わ、わたし、なんて声を、おおんっ。だ、出している、ううううんっ」

(激しくかきまぜる音)

「はあんっ。あんっ、あつ、はあんっ。くううっ、んぐっ、んはっ、あんっ」

「やつ、やだっ、んんんっ、んはっ、あつ、がっ、ひぎいっ!!」

「い、かはっ、はあ、はうんっ、んっ、んんっ」

「んふう、んっ、くはあ、あああんっ!! んっ、はあ、や、ああああつ、あんっ」

(SEストップ)

「はぐっ、くふう。……う、あ、はあああ、はあああ、はあああ……」

「お、お……る……ひお? らに、しよれ……? か、から……だ、うぐ、かな……い……」

「し、しきゆうこう? おなかの、お、おくにあたるの、だめ……」

「はあ、はあ、子宮口(しきゆうこう)とか言うのに当たるから、こんなに感じちゃうのお?」

「やだあ、もうやだあ。その何とかというのを突かれたら、本当に、おかしくなるかも……」

「んんっ! んっ、やつ、あんっ! はふっ、んぐっ、んんっ、はあ、はあ、はあんっ」

「ぐりぐりこすりつけないでえ……。奥ばっかりい……」

「くふう……んっ、んぐぐぐ、んんっ、んんんんっ」

(ぐちゅぐちゅぐちゅとねっとりした音)

「ふう、はあ、ふう、んんっ、んっ、んはああ、は、はふっ、んくううう」

「はあっ、はあっ、く、悔しい」

「この男に、されるがままなんて。ああもう、体の奥が熱くなるばかり。もうやだあ……」

「はあああ、あふっ、くうっ。んっ、はあああ、はあああ、はあああ……」

「くっ。何がおかしいのよっ。女が苦しんでいるのを見て笑うなんて……」

「んはあっ、あんっ」

「はああ、はああ。え? ば、馬鹿なことを言わないでっ」

「わ、私は別に、おしりを振ったりなんてしてないわっ」

「本当に、私はおしりなんて……。あれ? え? ええ?」

「もっと気持ちよくなりたがってる? 私が?」

「そ、そんなはずないっ。もうやめて欲しいだけよっ」

「はあんっ、あつ、あんっ。はああ……」

「この男が男性器をビクビクさせるたびに、お腹が疼(うず)いちゃう」

「こんなの、嘘よお。私、本当に気持ちよくなりたがってるの?」

(激しくかきまぜる音)

「んぐうっ!! んっ、あああつ、あひっ!!」

「ひっ、いや、そこ、奥はだ、だめっ。いやああつ」

「はふっ、んくっ、んん。ん、んっ、んはあつ、あ、や、ちが、んんんんっ」

「はあっ、はあっ、あああんっ」

「あんっ、あっ、くうんっ、んんっ、んはあ、はあああ、もう少し奥う……んんんっ」
「ひいっ！ いっ、あんっ！ それ、そこに、ちが、もつと横、んんんんんっ」

「ああもうじれったいわねっ」

「もう少し、もう少しで、この体のうずきがおかしくなりそうだというのに」

「……え？ おかしくなりたい……？ わたし、何を言って……ひっ！？」

「いひいっ！！ ひっ！」

「あっ、あがつ、そこっ、お、おとおとおっ。おほお、しょ……に、当たると……」

「き、きひ、ひひ……。気持ちいいの————っ」

「んのおおっ、おほおっ！ おとおっ、おああああああ。それぞれそれっ！！」

「そこをズンズンして欲しいのっ。いっぱい突いて、突いて突いて————っ」

「んひーっ！ ひぎいいいいいっ、ぎもぢいいいいいいいっ」

「しゅごいいいいい！！ あは、あははは、あひひひっ」

「ひーっ、ひーっ、ひあああああああああああああ」

「しゅごい、しゅごいいいっ！ こんな知らないっ。知らなすぎておかしくなるううううっ」

「ああああああああ。こ、こわ、壊れる、壊れた、わたし壊れた————っ」

「あがあああっ！」

「あひいっ、ひいっ、ひぎいっ、いひ——っ、んほおとおお————っ」

（おしっこ音）

「あひやあっ！？ あひいいいっ、おしっこ漏れちゃった、もれちゃったのっ。んあああっ、お漏らしも気持ちいいの————」

「ああ——っ、あーっ、あーっ、あああああああああ」

「らめえええっ。らめっ、ひっ！ ひぎっ、ひっ、イグッ、イグイグ！！」

「イグから見ててっ。見てください————っ」

「んおとおっ、おっ、おとおとおっ、おしっこしながら、いっぱいイグうううううううううううう」

（射精音）

「ひぎいいいいいいああああああああ——————————っ」

（おしっこ音）

（引きつけを起こした感じに）

「ああ——っ、あ——っ、はひっ！」

「ひっ、ひぎっ、ひ、ひっ、ひぐっ、うひ、ひ、ひっ……」

「はひ、ひっ、ひふっ、ふ、ふうう、ふぐ、んんん」

「ん、んんんっ、ん、んはあ、あっ、あふっ、ん、んほお、お、おとお……」

「へ、えへ、えひひ、ひ、ひは、はは、あ、あ、あ……」

「い、イグ、イグの、ど、どまら……な、いひいっ、ひぐううううううう」

「んほおとおっ、お、おひっ！」

「全てが真っ白になったような感覚」

「あれは本当に凄かったぁ……」

「もつともつと欲しい。欲しいけど、どうしても素直になれない」

「もつとイキたい気持ちとお、やっぱりだめって気持ちい……」

「頭の中でえ、ぐるぐるぐるぐる……まわってえ……」

「とにかくいっぱいエッチしていたらぁ、あの男が言ったのお」

「叔父様が……来たって……」

（鉄ドアを開く音）

「叔父様が……来たの？」

「ああ、叔父様……。お久しぶりですね……。あの、叔父様にぜひ、お聞きしたい事が……」

「叔父様？ どうして、目を合わせてくだらないのですか？」

「もう、私を見たくないぐらい……。私は、汚いですか？」

「叔父様が助けてくれるのを……一日千秋（いちにちせんしゅう）の思いで……。え？」

「お、叔父様？ どうして、お、お尻をさわるおですか？ んんっ。んっ、んはああ」

「だめ……。もう、私の体……」

「凄く敏感になっていて、ちよつと触られただけで、あそこがぬれちゃうんです」

「恥ずかしいから、触らないでえ……」

「はうんっ。んっ、んはぁ、あ、あんっ。あつ、や、んんん。くすぐったあい……」

「ん、はぁぁぁ、あふう。叔父様あん。触っちゃ、だめえ……。ひっ!？」

「いふっ、ふあっ、あひいんっ!！」

「そ、そこ、お尻のあ、あ……。触らないでください。そこは特に汚いですっ」

「え？ アナルセックス？ それは、な、何ですか？」

「こ、こ、肛門で？ は、あ、そ、そういえば、お尻の穴では一度も……」

「まさか、え？ やだ……」

（ズボンを脱ぐ音）

「ダメっ。叔父様、お願いしますっ」

「私たちは、親戚ですよ？ お願いですから、正氣に戻ってください」

「ひっ、い、いひいっ!？」

「んああ、あ、あ、お尻を撫でるのをやめてください……。くうっ」

「んんっ!！ ん、ぐっ、あ、あ、ああああああっ」

「無理です、入りませんっ。絶対に入らないいいいいっ」

「ひぎいっ！！
い、がつ、あ、
あああああああつ」

「だめ、裂ける、裂けちゃうつ、いだいっつ、あああつ、いたいーっつ」

「きやあつ。うぐ、ぐぐ、叔父様、やめて。力なんて……抜けません」

「さ、裂ける、裂けてく。メリメリって音が鳴ってるのに」

「お願いですから、叔父様一つ。あつ！？ いっただああああああつ」

「んひいつ！ ひつ、ひひひひつ！！」

「抜いて、ぬつ、いいいつ！！！」

「ひい、ひい、ひぐつ、う、ん、んぐあああつ。また入ってえ」

「でも、抜かれる時は、まるで、……してる時みたいなき、気持ちよくなっちゃうのおつ」

「おほお、ほあ、あ、はあ、はあ、はあ、はひっ!? ひぎつ、んぐううう」

「んぐうつ、んつ、んおおおつ」

「あふうつ、んぐううう。んつ、んおうつ！！はあ、はあ、はあ」

「んあああああつ！！ 一気に抜くのは、らめえええええええつ」

「んひい
い
い
い
い
い
t
!
!」

「おおあああつ!! もう、やめ……て、お願い、叔父様、やめてえ……」

「うっ、うぐっ、うう……。ふあ？ あ、アナルセックスの感想？」

「んあっ！ あひいつ、ひいんつ、ひつ、ひいぎつ！」

売られたお嬢様

「はぐっ、んふう、んんっ、い、言いますっ」

「言いますから抜かないでえっ、んはああああああっ」

（潮吹き音）

「き、気持ちいいです……」

「アナルセックス、気持ちいいですから、もう……許してください……」

「んんんんっ、んはっ、あんっ!!」

「あ、はあ、はあ、はあ、抜けたあ……。お、終わった……」

（ごそごそ何かしているような音）

「はあ、はあ、はあ。んっ!!」

「お、叔父様？ 何か堅いのが……。え？ それは何ですっ!？」

（挿入音）

「んぐあああああっ!! いぎっ、いいっ、いつ、いだっ、あ、あああああああっ」

「堅い、堅すぎるうっ。長いっ、くるじい……。ぐ、が、あ、あああ……」

「おごおおおっ! おっ、おおおおっ!!」

「おうっ、おっふ、んぎいいっ。ひっ、ひぎっ! いぐっ、がっ、あああああああっ」

「ごりごりしてるっ。イボイボがいつぱい、お尻の中がえぐれてくううううっ」

「んひいっ!! ひっ!! あっ、ひいひいひいっ!! ひ、あっ、ああーっ」

（潮吹き音）

「あ、あ……。あ、はああ、はああ、はああ……」

「ま、真っ白……。これ、あれと同じ……。あの時と……」

「んほおっ! おおうっ。おふっ、んほっ、おおうっ、おっ、おっ、おおおっ」

「それ、ダメっ。叔父様、やめてっ。お腹の方まで突かれたら、あひいっ!!」

「やだ、あああ、子宮まで刺さってるうう」

「うぐうっ。んっ、んっ、んはあああっ!」

「あふっ、んっ、んおっ、おおうっ、おっ、おおお。叔父様ーっ」

「許してっ、もうやめ、えぐううっ。んぐっ、ひいひいっ、ひいっ、ひあああああっ」

（お尻を何度も叩く音。繰り返し）

「ああっ! あんっ、あんっ、あっ、あああああっ」

「ひいひいっ、ひぎっ! いっ、いぎいいいっ」

「い、イグっ、気持ちいいですっ。お尻、しゅごいいいっ。いひいひいっ!!」

「叩かれるのも、ずぼずぼされて、子宮まで突かれたら、真っ白になるのおおおっ」

「おひいっ!! ひああっ、あっ、あがっ、あっ、あああああああああっ」

「イグっ、イグううううっ。叔父様でイギマスううううっ」

「んひうっ! あっ、あああっ、叔父様の欲しいですっ」

「叔父様の精液、叔父様の熱くてどろどろの精液を出してくださいっ」

「んあああつ!!」

「もうやあああつ。あああつ、あーっ、ああつ、お尻でイグうううううううつ!!」

(射精音)

「いやあああああああああああああああああつ」

「あひいっ!!」

「ひぎいいいいいいいっつ。い、ぐっ、ぐふ、ふ、ふへ、へ、は、はひ、ひ……」

「ひう……。う、んひ、ひぐっ、う、お、おとおお……。お、おふうっ」

(ぐちゅぐちゅっといった感じの音)

(おしっこ音)

「はあああああ……。あは、はは、叔父様で、い、イキまくっちゃった……」

「おしっことまらなあい……。んはああ」

「ん、んんっ、んっ!!」

(ブビュッとおならと一緒に液体が出るような音)

「んんっ、んっ、んんっ、んはあ。はああ、はああ、はああ……」

「ふえ？ は、はい。叔父様の……。き、気持ちよかったです……」

「私のお尻……。叔父様のモノ、です……」

「はあ、はあ、あはは……」

「私、何を言わされてるのかしら。どうして、こうなったのかなあ」

「叔父様、あの男に脅されてるのかなあ。ああ、早く助けて……。叔父様……」

「ううん。まだお尻でセックスするのぉ？」

「叔父様のお……。えっちい……。ん、あつ、あはあつ、あ、あああああつ」

「ふ、ふふ……ふふふ、うふふふ」

「親戚の男性器でも、頭がおかしくなるぐらい気持ちよかったなんて……」

「くふふふ。私って、最低……。うふふふ」

「もう、男性器なら何でもいいかも。気持ちいいんだから、仕方ないわあ」

「あははは……。はは、くふ、ひひひ……。はあ、もう変態になってしまったんだから、どうなってもいいわよお」

「ああでも、それでも叔父様に助けて欲しいなあ……。今はきっと、仕方なく私とアナルセックスをしているんだろうしい……」

「私はあ、耐えてみせますからあ……。はああ、それにしてもお、一ヶ月、早く経たないかなあ……。叔父様と一緒に、お家へ帰りたいなあ……」

（バシャツと水をかけられる音）

「……………あ、う、うう……。み……ず……」

（ここから、悩ましげに色気がある感じに）

「あはは。乳首がビンビンに起ってるう。あそこもウズウズしちゃってるなあ」

「はあああ。ん？ なあに？ 今日は目隠したままエッチをするのお？」

「んふう。ああ、腋とか臭いなあ。でも、なんかもうこの臭いがたまらなあい」

「あなたもお、そう思うでしょう？」

「え？ 移動するのお？」

「ふふ、家に帰るわけじゃないんだろうけど、ここじゃない場所に行けるなら、どこでもいいわ」

（がさごそという感じの音）

「ええ、何も見えないわ。真っ暗……」

「ふふふ。私の人生も真っ暗だわあ。うふふふ……」

「あそこもお尻も、全部エッチになったものお」

「うふふ、ふふ、くふふふ……。ひひひ、ひ、ひひひ……」

（足音）（鉄ドアを開く音）

「んん。しっかり歩けて言われてもお。たっくさんエッチしてきたんだもの」

「もう足に力なんて入らないわよお」

「あら？ これは、いす？ いえ、跳び箱かしら？ んあつ、ああんっ」

「タオルで、んんっ。おっぱいを拭くなんてえ。はあ、新しい攻め方なのかしらあ？」

「んんっ、んあああ。背中まで。あつ、んっ、んあ、ああんっ」

「あふう。全身を拭いただけなの？ 誰か、新しい人とセックスさせるつもり？」

「けど、なんだか久しぶり……」

「体に精液がこびりついた感覚がしないのって……。何日ぶりだろう」

（足音ストップ）

（車のドア開閉音）

「車？ どこに移動するのかしら？」

「まあ、どこに行ってもすることは同じなのでしょうけど……」

「そういえば、ここに来る時はシートが汚れているって怒ったわね。懐かしい」

「今となつては、私の方が醜く汚くなっているけれど……」

「そういえば、あの運転手だった彼も、私とセックスしたのかしら？」

「ふふ……。たあくさん、エッチしたものね」

「どの男性器だったのかしらね、ふ、ふふ、ふふふ」

「あら？ その声は叔父様？ 叔父様もいらつしやるのですか？」

「なんだか、楽しそうな声。うふ、叔父様。私のアナルは気持ちよかったかしら？」

「初めての時から、何回か犯されてますけれど」

「そう……。満足してくださったのなら結構です」

（車の移動中のようなエンジン音）

「ん、んん。はあ。叔父様、太ももを撫でてください」

「もう、それだけでも感じてしまう卑猥な体になったのですから」

「はああ、あふう、んっ。叔父様あ……。あつ、はああ、んん、ん、はああ」

「はあ、ふう、んふう。んく、ん、はあ、はあ、はあ、あつ、あつ、あんっ」

「やだあ。凄くイヤらしい手つき。ん、叔父様あ……。んはあ、はふうん」

「んんっ、んっ、あつ、んっ、くうううううっ」

「はああああああ……。はあ、ふう、はあ……。少し、イッてしまいました……。はああ」

（車の停車音）

（投げやりな口調で）

「あん。到着したみたいですわね……。何をするんですか？」

（車のドア開閉音）

（歩く音）

「せめて、何かしゃべってくださいでも良いじゃないですか。はあ……。あら？」

「この手触り……。跳び箱？ きゃあっ」

「あの、何をしているんですか？ その、痛っ、んんんっ」

「両手、両足……。どれも手錠みたいので繋がれてるう」

「跳び箱の上で俯せ（うつぶせ）にさせられてえ……。ふふふ、何をしてくるんだらう」

「はああ、はああ」

「こんなにお尻を突き出してる格好で、どんなエッチな事をするんですか？」

「もしかして、今日は叔父様以外の人とアナルセックスをするのですか？」

「誰とセックスをしても構いませんけど、せめて少しは濡らして欲しいのですけれど……」

（馬のいななき1

「……………え？」

（馬のいななき2

「……あの、今のって馬の鳴き声では？ あの、ここに馬がいるんですか？」

「ど、どうして馬が？ もしかして、私の両手両足に繋いだ手錠の先に馬がっ!？」

「い、いや、そんな拷問みたいな事をしないでっ」

（馬のいななき1大きく）

「ひいっ!!!!」

「ど、どうして……すぐ近くで、き、きき、聞こえるの？」

「お願いですっ。何がどうなってるのですかっ!？ 教えてっ!!」

（馬のいななき2大きく）

「いやああああっ。いやあーっ」

（びたんとお尻に馬の男性器が当たる）

「ひいっ!!」

「ひっ、ひいっ! 何これ？ 何よこれっ。この巨大な物体は何なのですかっ!？」

（がさごそといった感じの音）

「んんんっ。ああ、やっ目隠しを外してくれ……」

「ひいっ!？ え？ 嘘……。きゃあああああああああ」

「う、う、馬、馬ーっ、何で？ 何でここに、こんな巨大な馬がいるのよっ!？」

「じゃあ、お、お尻に、あ、当たってるのって……」

「うぐっ……あ、う、あ、あああああ……」

「で、でかい、人間の腕よりも太いいいいいっ」

「これが、馬の男性器だともいうの？ まさか、これを？ これを私に？」

（過呼吸ぎみに）

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

「むり、これは無理です……。あの、お、お願いします……」

「ほ、ほか、他の事、何でもしますから……。これだけは、ゆ、許して……」

（馬のいななき1）

「ひいっ! い、いや、死ぬ、死んじゃう、こんなの、いや、いやよ」

「イヤって言うてるでしょーっ」

（足音）

「や、やめてっ。押さえつけないで!! いやっ。イヤよっ。いやーっ、きゃああっ」

「ひっ!？ ひっ、ひいっ、ひっ、ひあっ、あ、あ、あああっ、いやああああっ」

「助けて、叔父様——っ」

「ひひひひひひっ！！ いや、イヤイヤイヤイヤイヤッ！！！」
「やめて——っ」

（裂けるような音）

「ぎゃあっ！！」

「あつ、がつ、あつ、あつ、あああああつ」

「無理っ、無理無理無理無理っ！！」

「抜いて、抜きなさいっ！！ やめて、いやっ、あつ、ぐつ、がつ、があああああつ」

「はああつ、はああつ、はああっ！！」

「こ、ごわ、れ、るうっ、ううううっ、うがっ！ ギゃあっ！！」

「げぼおっ！！ おええええっ！ げぼっ、ごっ、お、おええええっ！！」

「ふー、ふー、ふー……。う、げふ……」

（水をぶっかけられる音）

「がはっ！ ぶはっ、はああつ、はああつ、ひいっ！ いっ、いぎっ！？」

「お、お腹……分かる。分かっちゃうっ」

「いや、いやああっ！！ 馬の、馬のお腹全部にあるっ！！」

「う、あ、あ、あああ……。何で？ どうして、入ってるのよ……」

（馬のいななき1）

「ひいっ！！ いや、やだ、見ないで、私を見ないでっ、動こうとしないでっ！！」

「いやああああああああああああっ！！ ぐげええええっ！！」

（馬のいななき2）

「ごえっ！ おっ、おごっ！！」

「ごえっ、げぼおっ、おっ、おとおおっ、おごっ、おっ、おあああああつ」

「じ、じぬっ……。じ、じぬうううっ、うあああつ！！ あぐっ、あつ、ああああつ」

「はぐっ、んぐっ、んごおっ！？」

「おっ、おおうっ！ おぶっ、うええっ。ひいっ！ ひぎいっ！！」

「いやああっ！！ いやっ、いやあああつ。どうしてっ。どうしてなのよっ！！」

「んああっ！ あひいっ！ ひぎっ、ひいっ、ひいっ。ふぐううっ」

「んほおっ、おおうっ、おっ、おとおっ」

「痛いっ、痛いのにつ、どうして、どうして気持ちいいのよ——っ」

「んああああっ！！ あつ、あがつ！？」

「あひいっ、ひいっ、いぎいひいひいっ！！ んがあつ、ああ——っ」

「ご、われるうう。頭がおかじぐなるうう」

「ひいっ！ いぎいひいっ、おおっ、おはあつ、あひいっ」

「ひ、ひひっ！ ひぎっ！！ んぐっ、あああああっ！！」

31

「ひいっ!! いぎっ!! いぎっ!!」

「ごえっ! おっ、おごっ!! あぐっ、あっ、あああっ」

「はぐっ、んぐっ、んごおっ!? おっ、おおうっ! ひいっ! ひぎいっ!!」

「んああっ! あひいっ! ひぎっ、ひいっ、ひいいっ。ふぐうううっ」

「んほおっ、おおうっ、おっ、おおおっ」

「んあああっ!! あっ、あがっ!? あひいっ、ひいっ、いぎいひいひいっ!!」

「んがあっ、ああーっ」

「ひ、ひひっ! ひぎっ!! んぐっ、あああっ!!」

「んひいっ!! ひいっ、ひはっ! あひいっ、ひいひいっ、いひいっ! いひいーっ」

「ひいいっ、ひぎいひいひいっ」

「あひ、ひ、ひひ……」

「あひい!! ひぎっ! ひぎっ! あひいひいひいひいっ!!」

「あぎっ! あぎっ! しぬっ! しんじやう!」

「ひいひいひいひいひいひい!!」

「しぬっ! しぬっ! しぬっ! しぬっ! しぬっ! しぬっ! しぬっ! しぬ!!」

「いくっ! いくっ! いくっ! いくっ! いくっ! いくっ! いくっ! いくっ!!」

「ひぎいひいひいひいひいひいひいっ!!」

「あひっ! あひっ! いった! いった!」

「いったのおおおおお!!」

「ひぎいひい! とまって! とまって!」

「あぎ! あぎいひいひいひい」

「はひいひいひい! はぐっ、んぐっ、んごおっ!?」

「おぶっ! ふぐうううううっ」

(過呼吸気味で)

「はひっ! はひっ! はひっ! はひっ!」

「たすっ……たすけ……」

「ひぎいひいひいひい! あひ、あひ、あひひいひいひいひい」

「ぐがっ! が……あが……」

「あひっ、あひっ、あひっ、んごおおおおお」

「あぎ!」

「はあはあはあはあはあ」

9. サークル挨拶音声（購入者用）キャラづくりする必要なく、事務的に読んで下さい

「サークル、ケチャップ味のマヨネーズ」

「この度は本作品をご購入いただきありがとうございます」

「本作品は音声作品です。イヤホンやヘッドホンなどを使用して」

「椅子に座ったり、ベッドに横になるなどしてリラックスした状態でお聞き下さい」

「音声に気をとられすぎて椅子やベッドから落ちたり」

「物にぶつかるなどして怪我などしないようお気をつけ下さい」

「また、イヤホンやヘッドホンの端子が抜けていることに気づかず」

「スピーカーから大音量で本作品を再生した場合、あなたの人生に深刻な

問題を発生させる恐れがありますのでくれぐれもご注意ください」

「それでは、本編をお楽しみ下さい」

10. 体験版ダウンロードの案内音声

「この度は体験版をダウンロードいただきありがとうございました」

「体験版をご試聴いただき、気に入っていただきましたら

製品版をご購入いただけるととてもうれしいです」

「今後ともサークル、ケチャップ味のマヨネーズをよろしく願いたします」